国語科学習指導案

指導者　　岡本　恵里香

1　日　　時　　令和５年 11 月 18 日（土）　第２校時（10：05～10：55）
2　学年・組　　中学校第２学年２組　39 名（男子１４名，女子２５名）
3　場　　所　　中学校　２年２組教室
4　単 元 名　　語り手と王に着目して「走れメロス」
5　単元について

「走れメロス」は、1940 年『新潮』5 月号に発表された、太宰の中期の代表的な作品である。精選版日本国語大辞典には、「友人を身代わりに処刑を三日間猶予されたメロスが、さまざまな障害を乗り越えて帰って来るまでを描き、信ずるに足る人間像を提示した。」とある。

本教材は、長野秀樹が唱える「透明な語り手」の存在や、勢い良く読ませる太宰の文章によって読者がメロスと同化しやすい作品である。授業者自身が中学生の時、「美しい友情の話」という解釈が授業でなされたが、「自分がセリヌンティウスなら、竹馬の友にいきなり人質を頼まれ、こんな友達は嫌だ。」と思った違和感は、現在も続いている。太宰は 1940 年 11 月に新潟高等学校に招かれ、「友情」について講演をした。この旅を「君」に語る「みみじく通信」という短編小説がある。この中には、「『走れメロス』という近作を大声で読んでみました。（中略）『青春は、友情の葛藤であります。純粋性を友情に於いて実証しようと努め、互いに痛み、ついには半狂乱の純粋ごっこに落ちいる事もあります。』と言いました。それから、素朴の信頼という事に就いて言いました。シルレルの詩を一つ教えました。理想を捨てるな、と言いました。」とある。太宰は「走れメロス」で「信頼」や「理想」を描いているのか、または「半狂乱の友情ごっこ」を描いているのか、捉え方は生徒によって違っており、「本当はどちらだろう」という疑問が湧いてくる。これをもとに「メロスはどういう人か」という疑問を中心課題として扱う。語り手のメロスに対する評価を生徒は無意識のうちにそのまま受け取りがちだが、その語り手の上手さから離れ、物語を別の人物の視点で捉えなおすことによって、「語り手」のフィルターを感じることができる。また、他の登場人物の立場から冷静にメロスの言動を観察するとメロスに対する印象が変わり、一次感想と二次感想が変わり、生徒自身が自分の読みの変容を感じることが可能な教材である。

近年は人を信じられなかった暴君が再び人を信じる君主になる変化に着目した実践が多くなっているが、この王の変化と、執筆当時の太宰自身の心境と重なる部分を感じる。さらに、「みみじく通信」から、太宰はシラーの「人質」を読んで「信頼」や「理想」を感じていたことが分かる。作者自身が語った文章を読み、「王」の考える信実や理想、信頼といったものや人の多面性や弱さを一般化して考えることによって、いっそう物語が広がり、一人ひとりの読みも広がると期待する。

本学年の生徒は、１年次に「少年の日の思い出」で同じ出来事でも語り手のフィルターを通した出来事が語られることを学んでいる。本文から感じたエーミールは嫌な人と感じる生徒が多いが、もしかしたらエーミールは「こうしたら展翅はうまくできるよ。」とアドバイスしたのに「私」が歪んで卑屈に捉えたのかもしれないことを気付かせ、エーミールが純粋にアドバイスしたならどんなセリフだったかという空白を考える学習をした。「語り手」によって登場人物が評価されること、同じ事実でも語り手の目や心のフィルターを通すことによって捉えが変わり、それを元にした表現のみを私たちは普段目にしていることを感じさせたい。生徒達は目の前にあるテクストや情報が事実の全てだと感じやすい傾向があるが、言葉のより良い読み手になるために、SNS 等も含め日頃無意識に受け入れている言葉も、誰が語るのか、他の側面はないかを考えられる人になって欲しい。

「走れメロス」は、国語が好き、得意と感じている生徒にとっても、漢字の読みや言葉の意味が難し

いと感じる小説である。国語の学習に難しさを感じる生徒には、語彙不足によって内容面ではなく「難しくて分からない。」という感想文が表れやすい。そのため、本実践では「走れメロス大じてん」と称する文学辞典（事典）を、タブレットを使って Google スプレッドシートに共同編集で作成する。「走れメロス大じてん」の第１章は「言葉編」として、意味調べをした言葉の意味をまとめた辞典である。自分の分からない言葉を知るだけでなくクラスメイトが難しいと思っている言葉も知り、語彙を豊かにすることをねらう。「走れメロス大じてん」の第２章は「人物編」として、人物についての一次解釈と二次解釈をまとめた事典である。クラスメイト全員の人文解釈に触れることによって、より自己の解釈を広げることをねらう。「走れメロス大じてん」の第３章は「Ｑ＆Ａ編」として、自分の疑問点にクラスメイトが回答する形で読みを共有する。教師が用意した読みの展開通りの一斉授業にするのではなく、必要最低限の読みの確認と発問に縛って「走れメロス大じてん」を作ることを学習活動の中心とする。それによって、生徒自身が何度も本文を読み返して自分の読みを生み出し、さらにクラスメイト全員の読みと出会って自己の考えを変容させる授業にしたい。グループでの話し合い活動が少なくタブレットを使う時間が多いが、話すことが苦手な生徒やゆっくり学ぶ生徒にも自己の意見を入力という形で表出できる、個別最適な学習を目指した授業である。

本実践では、第０次の「しつらえ」として二つのことを行う。一つ目は、太宰治「みみじく通信」を読むことである。中学校、高校ではなかなか教科書外教材を読む時間を取ることは難しいが、今回は「みみじく通信」の中でも太宰が講演会で「走れメロス」に関して語った部分だけを生徒に配布し、全文は国語科の掲示板で紹介した。作者や作品について便覧を読むことや、紹介動画を観ることは実践可能な「しつらえ」の一つである。二つ目は、アニメや漫画等の公式ガイドブックを見せ、「走れメロス大じてん」のイメージを共有することである。学習活動や成果物のゴールイメージ、目的を教師と生徒が共有することによって、より良いものを作ろうという生徒の主体的な活動が生まれると感じる。

登場人物の気持ちを想像するのが苦手である生徒、物語と同化できず距離を置く生徒を物語世界に引き込むために、第１次の導入に「転生したら〇〇でした」という設定をし、登場人物に同化することをねらうと共に楽しく学ぶ雰囲気を作りたい。セリヌンティウス、花婿、ゼウス、フィロストラトス、王の視点からメロスの人物像を捉え、多角的に考えていく。それと共に、メロスの実際の言動と語り手の評価、１０里は約３９km しかないことや往路と復路で描写が全く違うことに気付かせ、「語り手」の巧みさを自覚した批判的な読みも必要なことに気付かせたい。

６　単元の目標

（１）　日常語彙ではない言葉の意味や働きを理解し、正しく使うことができる。〈知識・技能〉

（２）　主人公とは異なる人物の視点になって、物語を捉え自己の考えを表現することができる。〈思考・判断・表現〉

（３）　交流を通して他者の意見を聞いて自己の読みを広げようとし、その変容に気付こうとする。〈主体的に学習に取り組む態度〉

７　指導計画（全 12 時間）

次	時	学習内容
0	0.5	太宰治「みみじく通信」を読む。アニメや漫画等の公式ガイドブックを見せ、「走れメロス大じてん」のイメージを共有する。
1	1.5	始め～P200,10 行目までを読む。意味調べをし、タブレットで「走れメロス大じてん」（第１章言葉編）に入力する。一次感想①を記入する。

	2.5	P200,11 行目-P202,9 行目までを読む。意味調べをし、タブレットで「走れメロス大じてん」（第１章言葉編）に入力する。一次感想②を記入する。
	3.5	P202,10 行目-P206,18 行目までを読む。意味調べをし、タブレットで「走れメロス大じてん」（第１章言葉編）に入力する。一次感想③を記入する。
	4.5	P206,19 行目~終わりまでを読む。意味調べをし、タブレットで「走れメロス大じてん」（第１章言葉編）に入力する。一次感想④を記入する。
	5	第１章言葉編のシートを見て、漢字の読みや言葉の意味を教科書に書き込む。
2	6	都でのメロスの言動に着目し、セリヌンティウスの視点からメロスの人物像を考える。
	7	前時の読みを「走れメロス大じてん」（第２章人物編）に入力する。村でのメロスの言動に着目し、花婿の視点からメロスの人物像を考える。
	8	前時の読みを「走れメロス大じてん」（第２章人物編）に入力する。都への道中のメロスの言動に着目し、ゼウスの視点からメロスの人物像を考える。
	9	前時の読みを「走れメロス大じてん」（第２章人物編）に入力する。町外れと刑場でのメロスの言動に着目し、フィロストラトスの視点からメロスの人物像を考える。
	10	前時の読みを「走れメロス大じてん」（第２章人物編）に入力する。王の視点からメロスの人物像を考える。（本時 10／12）
3	11	王の変化とその理由を考える。メロスの心情の変化から、人間の多面性や弱さを考える。
	12	クラスメイトの疑問点に回答する。二次感想を記入し、一次感想と比較する。

8　本時の目標

王の視点からメロスの人物像を考え、表現することができる。【思考・判断・表現】

9　「教科等本来の魅力に迫るための教師の資質能力」との関連

基準	具体的な児童・生徒の姿
A	王の視点から捉えたメロスの人物像を、新たな視点で考えて表現できている。
B	王の視点から捉えたメロスの人物像を、自分の考えや言葉で表現できている。〈評価規準〉
C	王の視点から捉えたメロスの人物像を、自分の考えや言葉で表現できていない。

手立て【関連する教師の資質能力】

【授業構想力】

○自己の読みが生まれる障壁となりやすいものを取り除いてテクストと向き合えるように、意味調べの時間を取り、「走れメロス大じてん」（第１章言葉編）の作成を１次に設定したこと。

○一度に全文を読ませず小分けにしてプロットの理解をした上で、描写に着目させるようにしたこと。

【授業実践力】

○タブレットを使って生徒のワークシートや教科書をそのまま映し出すことによって、視覚的に理解しやすくすること。

○自己の読みを表出する時間に、最低限の読みのキーワードを考えたり本文に着目さたりすることに

よって、短い時間で多くの生徒に自己の読みを創出できるよう個別指導すること。

10　学習の展開

学習活動と内容	指導上の留意点（◆評価）
１．本時の流れの確認。	
王の視点からメロスの言動を考え、自分の言葉でメロスの人物像を表現することができる。	
２．前時の読みを「走れメロス大じてん」（第２章人物編）に入力する。	○自分の考えを表現することが難しい生徒への個別指導を行う。 ○深い読みを全体に紹介する。
３．本文を音読する。	○漢字の読みに注意し、王の視点で考えることを音読の前に伝える。
４．王の視点からメロスの人物像を考える。	○　読み元の一つになる言葉を、スクリーンで映して確実に確認する。 ◆　王の視点から捉えたメロスの人物像を、自分の考えや言葉で表現できている。【思考・表現・判断】
５．まとめ	○メロスの多様な面への気付きを価値づける。

【参考文献】

長野秀樹「太宰治作品における『語り手』の問題：中期作品を中心に」2021 年、九州大学国語国文学会